

論說研究

マキヤヴェエリーの社會哲學

不破 祐俊

- 一、マキヤヴェエリーの時代
- 二、マキヤヴェエリーの生涯
- 三、『君主論』其他
- 四、社會觀
- 五、『君主論』の梗概とその論調
- 六、マキヤヴェエリー批評

一、マキヤヴェエリーの時代

社會理論に關する史的發展の上から見て、十四、五の兩世紀にはその最も著しい過渡期の姿を見出し得るであらう。セント、トーマス(S. Thomas)及びダンテ(Dante)は未來に對して何

等の導標をも與へてくれなかつた。彼等の觀察は鋭敏であつたとは云へ、殆んど未來の趨勢に對して何等影響するところがなかつた。(1) 教會と國家とは依然として、少くとも理論上に於いて絶對的權威を建設せんが爲めの鬭争が續けられてゐる間に、事情はそれと反對の方向をとつて、容赦なく展開されつゝあつた。我々は先づこの推移事情の二三を見なければならぬ。

これ等の變化中、先づ最初に擧げるべきは國民的國家の發達であつた。過去の世界的帝國主義的理論は理想としての國民的君主政體へと移り行きつゝあつた。中世に於いて重要なりし封建制度の勢力は有力なる支配者の勃興に依つて到る處で破壊され來たつた。これ等支配者はこの古來の制度を抹殺することは出来なかつたとは云へ、民族、國民を基礎とする政治的制度を組織することは出來たのであつた。

十四、五世紀に亙つての所謂百年戰役 (Hundred Years' War, 一三三九—一四五三) は英佛兩國の國家的區別を明確にし、畢竟、國民的國家として、兩者の勢力は増大したのであつた。兩國は漸次、封建諸侯の權力を殺して、十五世紀後半、王制を確立し、佛はルイ十一世 (Louis XIV) の下に、英は薔薇戰役 (War of the Roses, 一四五五—一四八五) 後、ヘンリー七世 (Henry VII) の下に、夫々統一されて、コンに強大なる君主國家が新に樹立せられた。

スペイン王國はカスチラ (Castilla) とアラゴン (Aragon) が、前者のフェルディナンド (Ferdinand)

(1) 長崎高商研究館彙報第十三卷第三號第四號參照

と後者のイサベラ (Isabella) との結婚關係に依つて結合して、統一が大成した。

マキシミアン (Maximilian) は餘り成功せざりしとは云へ、ドイツに於ける封建國家の相争へる利害關係をこれまた統一せんと努めつゝあつた。

いづれにせよ、この時代は強力者の時代であつた。支配意志に表現せられたる個人的才幹を伸ばし得るとすることが、ローマ教會の天下統一統治の理論よりも、一層人心を感銘せしめたことであつた。

更に、社會變化の第二の要素と見做さるべきものは西歐社會を通じての都市の勃興であつた。商工業が發展し、中産階級が發達し、増加するにつれ封建諸侯の城下には小商人、貿易商人、工人等の住居が群り建てられるに至つた。これ等は、數に於いても、その重要さに於いても漸く、社會的に認められ、遂には彼等の多くは、諸侯より自治の權利を要求し得る程度に迄勢力を持ち來り、經濟的方面に於いて、封建制度崩壞の重要な一要素を形成することゝなつた。この動きこそは個性を創造し得たところのもので、資本經濟の開始と共に、市民階級を發達せしめた。我々はこゝに急速に増大しつゝある中産階級の人々の社會的、政治的自覺の起源を見出すことが出来るのである。これはそれ以前數世紀間、何等の意味を齎らさず、それ等の人々が封建制度に依つて受ける壓迫と苦痛とに對して何等有力なる抗辯をなし得なかつたところのも

のである。

ドイツに於いては帝權の衰滅と共に都市は實際上の獨立を獲得し、イタリヤに於いても種々なる状態の下に、フィレンツェ (Firenze) ミラノ (Milano) ナポリ (Napoli) ヴェニス (Venezia) 其他の小都市の如き自由都市の隆盛を見るに至つた。

第三の事情は教會内部に起つた。これはフランス王國君主權強大の結果、教會に對して一大打撃を加へたことである。フランス王フィリップ四世 (Philip IV) は教會財産税を課せんとし、法王ボニファツィオ八世 (Bonifacio VIII) と衝突し、大いに法王を辱しめた。一三〇五年、これが爲の老法王の憤死の後をうけて、フィリップは一人のフランス人を擁して法王とし、法王が傳統の聖地たるローマの「ベテロの座」を棄てしめて、南フランス、アヅイニヨン (Avignon) に留まらしめた。これ史上、「バビロン幽囚」(Babylonian captivity) と稱せられるもので、法王をして七十二年の歲月をさながらフランス國王の法王たるかの如く、或る意味での幽囚の裡に過させたのであつた。

法王がフランスの勢力の下に久しくアヅイニヨンに在つたことは、こゝにローマとアヅイニヨンとに夫々法王の選任を見るの事情に立ち入り、その後四十年間續いた教會の大分裂の初めとなつた。各々キリストの正當なる名代たることを主張し、互に他を黜けんとすることに依つ

て、自己の權利を擁護するに至つた。これ等の争も一四一四年に至つて漸くにして終末を告げ、再びローマのその座に法王は復することが出来たけれども、これに依つて、法王の威名と權力とは地に墜ち、昔日の面影を見せず、従つて教會の威信も著しく害はれ、イングランドのウィクリッフ(Wycliffe)及びボヘミヤのフス(Huss)等の抗議へと導かれたのであつた。(2)

第四の要素はイタリヤに於ける文藝復興であつた。一四五三年、コンスタンチノーブル(Constantinople)がトルコ人の手中に歸して、多數のギリシヤの知識階級の人々はイタリヤにその避難場所を見出した。都市國家間に於ける激しき政治上商業上の競争は知識を覺醒せしめ、現世の利益を増進するところがあつた。それ故に、ギリシヤの文化はこゝにその適合せる雰圍氣を見出し、新しき革命的結果を齎した。文藝復興はこの後の全文化に甚大なる影響を及ぼし、現代の科學、發展、發明、産業及び宗教、政治兩方面に於ける民主主義の時代を開いたとは云へ、當代の史家は皆、この最も華やかなりし知的覺醒の時代は、殊にイタリヤに於いて、説明し難き道德的矛盾を伴つたことを認める。

ヴィラリ(Villari)曰く。「到る處、自由は消滅せられ、専制家は跳梁し、家族結合は漸次薄弱となり、家庭はその神聖を汚され、如何なる人も最早イタリヤ人の善き信仰を信じなくなつた。」(3)

ローシヤ(Rogers)は曰く

(2) Robinson's History of Western Europe, Ch XXI.
Machiavelli's History of Florence, translated by Detmold, Vol. I, B. I.
(3) Niccolo Machiavelli and His Times, Vol. I, B. I. P. 5.

「文明は開發したが、中世の宗教文明と對峙せるが故に、その精神に於いては全く異教徒的のものであつた。——その美とか、文學とかに對する愛及び生活の享樂に於いて異教徒的のみならず、又——教會の禁慾主義に對する反動として——その不徳、露骨なる肉慾主義、利己主義に於いて異教徒的であつた。價值の全體に互つて變へられたのであつた。」⁽⁴⁾
 カスト(Cast)は更に邪曲な繪を描いてゐる。彼曰く。

「十六世紀の始めに於いて、イタリヤは心底までも腐敗してゐた。法王は烈しき不徳なる競争に於いて容易く優位を占め得た。アレキサンダー六世(Alexander VI)の宮廷は恐らく未だこの世に見られない最も不徳の集合所であつた。キリスト教徒であれ、異教徒であれ、如何なる徳もそこには見出されなかつた。五官的ならざる、或は肉慾的ならざる藝術は殆んどなかつた。恰もパツカス、ヅィナス、ブリアプスが再び我に歸つた時の如くであつた。而もローマはキリスト教徒であると自稱するを止めなかつた。」⁽⁵⁾

最後に、マキヤヴェリに直接、社會觀を與へたところのフィレンツェの状態を考究しなければならぬ。ローレンツォ、デイ、メディチ(Lorenzo di Medici)の下に於けるフィレンツェは簡單に云ふならば、イタリヤ共和国中で最も民主的、文化的、腐敗的の國であつた。その亂れたる混沌たる状態はマキヤヴェリの明敏さを以てしても尙ほこれを捌くことの出来なかつた

(4) A Student's History of Philosophy, p. 244. edited by Henley, Vol. I, p. XVII

(5) Introduction to Machiavelli in Tudor Translations,

程である。(6)

「ローレンツォ大公は醜汚なる不行跡の生活を送り繼續的、一般的なる探偵制度を維持し、最も私人的事件に干渉し、自分の氣に入らざる條件の人々の間の結婚を禁じ、而して又、最も低級な者に最も重要な職を與へては、彼の統治振りの華美に依つて萬人を眩惑せしめた。

それが爲め、ある著者はローレンツォを以て専制家であつたとは雖も、彼よりもよりよき、人々を喜ばしめる専制家を想像することは出来ない」と述べてゐる。(7)

マキャヴェリーはこれよりも更にローレンツォに對する注目値する觀察を下し、全フィレンツェは彼の死を悲しみ、而もその死後間もなく「イタリヤを零落せしめ、續いてその破滅の原因となるべく、而も何人に依つても撲滅することの出来なかつた困難の禍の種子が芽生始めた」と言明してゐる。(8)

一四九二年のローレンツォの死と一四九四年のフランス王チャールス八世(Charles VIII)のイタリヤ侵入とは、こゝに陰謀を企つる者もあらはれ、人民は叛亂し、メデイチ家の宮殿は劫奪され、フィレンツェよりメデイチ家を追ふに至つた。ドミニコ教團の律僧サザオナロラ(Onorata)の熱辯は一時フィレンツェ市の混亂を抑へるに充分であつた。彼はフランス人の勢力を頼みとし、こゝにメデイチ家に代つて、自ら一個の宗教的共和政治を樹立し、共和國建立の

(6) Cf. Machiavelli's History of Florence.

(7) Villari, Niccolo Machiavelli and His Times, Vol. I, pp. 59—60

(8) Ibid., p. 420.

大立物となつた。されど彼の權勢は束の間であつた。改革から改革へと止むことなく、烈しき反動が迅速に起つて來た。

フランシスコ教團の者の嫉妬と、一般民衆の喧號とは、ローマ法王アレキサンダー六世(Andreas VI)のより烈しき敵意と相呼應してその氣勢を上げたから、サヴォナローラの人望漸く傾き、遂に一四九八年、市役所前の廣場で死刑を行はれ、その身體は火中に投せられた。彼の共和政體は十八年間の混亂せる存續の裡に終りを告げた。一五一二年メデイチ家は再びフィレンツェを統一恢復して、その市の自由も終末になつた。而して、政治上の陰謀、暗殺はフィレンツェがトスカナ大公國の手に歸する迄、引き續いて行はれたところであつた。

一、マキヤヴェリーの生涯

ニコロ、マキヤヴェリー(Niccolò Machiavelli)は一四六九年五月三日にフィレンツェに生れた。マキヤヴェリー家は古代のトスカナ出身で、ヴァル・デ・ピカ(Val de Pica)に所有地があり、ゲルフ黨に屬してゐた。彼の母バルテロメア、ネリ(Bartolomea Nelli)も亦同じ家柄であつた。ニコロの父、ベルナルド(Bernardo)は、フィレンツェの市民であり、國際法學者であつた。

ニコロの少年時代及び教育の事に就いては何等詳細には判らない。彼はローレンツォ大公

時代のフィレンツェに於いて成人し、ラテン語を流暢に讀み、眞にその時代が産んだところの人と云はるべき者であり、メディチ家がその都市から追放されたことを目の邊り見、且つサヴオナロラの處刑をも見たと云ふ事等が、公的生涯に踏み出す迄に我々に知られてゐる事實であつた。

一四九八年、二十九歳の時に、彼は微賤の身より出で、フィレンツェの政治の要務に當ることゝなつた。フィレンツェ共和國政府の書記官として、外交の衝に當り、共和制の瓦解に至る迄、その任にあつた。彼の公生活は何等非難されるどころがなかつた。彼は外交使節としてフィレンツェ領内のみならず、ローマや、遠くフランスのルイ十二世及びドイツのマキシミランの宮廷に使したのであつた。一年半を悪評ありしロマニヤ(Romagna)のチェザレ、ボルヂア(Cesare Borgia,アレキサンダー法王の息)の軍隊中に過した彼は陸軍統制の實狀を審さに觀察し、こゝにフィレンツェの兵制改革をなし、傭兵を廢し國民軍の制度を採用し、現代の軍制を創造するに至つたのであつた。

一五一二年にはフィレンツェには變動があつた。國外の形勢に壓されて、この年、先述の如くメディチ家はフィレンツェへと歸り來つて、同共和國を滅ぼすや、マキヤヴェリも亦そのメディチの新主に仕へることを望んだことも空しくその官職を免せられ、加ふるにその翌年メ

ディチ暗殺の陰謀團露はれ、彼は共謀の嫌疑を受け、逮捕の上、拷問の憂目を見、罪なくして獄に繋がるゝことゝなつた。新しきメデイチの法王レオ十世(Leo X)に依つて、彼は赦されの身となり、意氣銷沈、フィレンツェ近郊サン、カシアーン(San Casciano)の自家の地にと退いた。フィレンツェを去つた後の彼の生活は慘めであつた。一五一三年十二月十日付で彼の友人フランセスコ、ヴェットーリ⁽⁹⁾(Francesco Vettori)に宛てた書翰中に最もよく彼の私的生活が記されてゐる。

「私は自分の農場に居ます。この前の不幸が起つて以來、フィレンツェには二十日間と居ませんでした。朝日の昇ると共に起き出で、伐採されてゐる私の森林に行き、そこで二時間ほど立止つて、前日の仕事を檢べたり、何時も相當の骨折をしてゐる樵夫や、近所のものど話し合つたりします。その森を出る時には、泉の湧き出でゝゐるほとりまで行き、それから小脇に、ダンテとか、ベトラルカとか、或はチブルス(Tibullus)とか、オヴィド(Ovid)とかいふやうな小詩人等の本をかゝへて、鳥に網をかけてゐる場所に行きます。これ等の作家の情熱の物語を讀み、それ等の人々の愛情からして、我が身のことなどを思ひ浮べます。これが私の一時の愉快な氣晴しです。それから、そこを出て、宿屋の入口に入り、通りかゝりの人と語り、近所の消息などを訊ね、色々な世の中の有様に耳を傾け、而して、人々の様々な趣

(9) ヴェットーリは當時フィレンツェ市政府の使節としてローマに駐在した人で、マキナヴェーリは彼と屢々交通して時事問題を論じてゐる。

味とか、氣質とかを書き付けます。こんなことをして、晝食時になれば、私の家族の者と一緒に私の農場で出来た貧弱なものを食べます。晝食後は宿屋に歸り、そこには何時も、宿屋主人、肉屋、粉屋とパン屋の夫婦がゐます。これ等の仲間と終日、トランプやすごろくで馬鹿な真似をします。

「僅か壹錢のことに就いても争ひ、サン、カシアアノから聞き得る程大聲で叫び、様々な口論、侮辱、罵詈の間答を續けます。

「然し、夕方になると、家に歸り、私の書齋に入ります。戸口で、泥濘で汚れた私の田舎服を脱ぎ捨て、王室の立派な上衣をまどひます。かく盛装して、古代の人々の書物を繙きそれを友とします。そこでは、古代の人々は喜んで私を迎へてくれますし、又、唯々、私の使命であり、天職であつたところの知識の泉を求めます。私は臆面もなく、その古代の人々と語り合ひ、彼等の行動に就いての理由を訊ねます。古代の人々は自分の仁慈に動かされて、答をします。四時間といふ間、私は退屈を感じず、すべての心配を忘れ、貧困にも脅威を感じず、或は死にも恐れません。私は古代の人々の仲間になつてつれて行かれます。而してダンテは「我々が學んだ所のものを忘れないやうにするにあらざれば、知識たり得ない。」

と云つてゐますから、私は古代の人々と談論して得たところのものを書きつけて置いて、君

主國(De Principatus)なる論文を作り上げました。その論文の中では、君主國の性質、その各種の様式及びそれが如何にして獲得せられるか、又如何にして維持せられるか、如何にして失はれるかに關しての推理を以つて、この題目の學問に出来るだけ深く入つてゐます。若し、君が私のこの亂筆のどの部分かゝ氣に入ることあるならば、必ず君の趣味に適すべき筈です。それは王公、特に新王公には悦ばるゝところとなるべき筈です。それ故に、私はそれをジュリアノ大公(Guiliano)に獻じようとするのです。(10)

これこそ、後に詳説せんとする彼の主著「君主論」である。更にカストが、マキヤヴェリ一の生涯中の、この時期に就いて語るところを引用すれば、

「彼の境遇は不幸であつた。一時拷問に依つて片輪にされ、政府に氣に入られず、友達には避けられ、ひどい貧困にあり、借財も脊負ひ、妻と四人の子供を持ち、物質上の境遇は極めて恵まれてゐなかつた。その上、更に悪いことには、彼は怠け者であつた。彼はこの共和國に優遇さるべきであつたので、それに對して望みを絶つやうなことはなかつた。而して、彼の報ひられたところは次のことであつた。彼は自分で氣落ち者のやうに思へた。彼は生來、大なる威嚴も備はらず、大なる道德的氣力も持たなかつた。彼はダンテを深く愛し、稱讚したが、一時たりともダンテを真似ることは出来なかつた。彼は官能の生活と著述とに満足を求めた

(10) Simon, Age of Despots, 244—6, Quoted from Morley, Machiavelli, Romanes Lectures, pp. 13—14.

が如何なる慰めをもそこに見出すことは出来なかつた。偉大なる事物は世の中に騒はしく廻つてゐたが、彼はそれ等と一切無關係であつた。⁽¹¹⁾

然しながら、六年後の二五一年に至つて、彼はメディチ家の樞機員ジュリアノ（後の法王クレメント七世）に依つて、政治組織改革の問題に就いて相談を受けたる者の一人に入り、且つ年俵百フロリンで、「フィレンツェ史」(Storie Fiorentine, History of Florence)を書くことを委ねられた。これは一五二五年に至つて完成した。一五二六年には、彼は軍事復興、フィレンツェの要塞防備に従事することゝなつたが、彼の得意の時代は再び來らずして、一五二七年六月二十二日、かりそめの病が基で、貧困の裡に寂しく、家族に護られながら、このイタリアの愛國者は逝つたのであつた。

三、『君主論』其他

ヘンリー・モーレー(Henry Morley)はマキャヴェッリーを以つて、アリスト(Aristo)タツソオ(Tasso)と共に十六世紀に於いてイタリアが産んだ三大著述家の一人を見た。⁽¹²⁾ 彼の數多くの著作中、主たるものは「君主論」(Il principe, The Prince)「リツッポ論」(Discorsi sopra la prima Deca de Tito Livio, Roma, 1531; Discourses on the first Decade of Titus Livius)「戦術論」⁽¹³⁾

(11) Cust, op. cit., p.:XIV.

(12) Introduction to the Prince, Universal Library, p. 5.

(13) 執筆は1519—20年。

(Dell'Arte della guerra, 1521; Art of War)「フィレンツェ史」の四を擧げることが出来る。而して、彼の社會哲學を窺ふ上には「君主論」「リッジオ論」との二つに就いて考察すれば足りる。

「君主論」はさきに、「君主國」と題して、ジュリアノ大公に獻せんとせるものである。この執筆中に於ける種々なる精神的影響、並びに外的條件の變化は書名をも「君主論」⁽¹⁴⁾と改め、且つジュリアノ大公は既に一五一七年に逝くなつた爲め、その甥にして、當時、支配の任に當つてゐたローレンツォ公に獻せられることになつた。マキャヴェリは再びメデイチ家に用ゐられんとする下心から出たことであつたかも知れないが、それは顧みられるところとはならなかつた。

ネイル(Neil)は詩人グレイ(Grey)に就いて云はれた「小脇に小さな本をかゝへて、名聲の通路を降り來つた人は他になかつた」なる言葉はマキャヴェリに就いても同時に當嵌ると云ふ⁽¹⁵⁾又、カストも次の如く云ふ。

「世の中で偉大なる書物で、マキャヴェリの「君主論」ほど小範圍に互るものはない。これほど明瞭に、直接に、率直に書かれた書物はない。出版以來、今日に至る迄、これほど多くの烈しき毒筆を奮はれたる、而も猛烈なる論争を惹き起した書物はない。「君主論」は世界に於ける如何なる書物よりも實際生活に直接の影響を持ち、又、中世紀の暗黒面を光明にする

(14) この書の執筆は先に述べたる如く1513年なれど、出版されたのは1532年 Rome に於いてであつた。

(15) Article, Machiavelli, Library of the World's Best

に、大いに與つて力あつたと云ふことは餘程確實さを以つて云ひ得るところである。⁽¹⁶⁾

「君主論」の簡明なるに反して、後に著された「リヴィオ論」⁽¹⁷⁾の記述に至つては、むしろ冗長に失するの嫌があり、分量にしても「君主論」の二十六章なるに對して、これは三卷一四二章で、約四倍乃至五倍の大きさである。又、「リヴィオ論」に於ける君主國に對する彼の考への多くは（これが彼の學說の中心であるが）「君主論」に於いて、繰り返し詳論せられてゐるが故に、マキャヴェリーの思想の主たる點を了解せんとするには、これは必ずしも必要ではない。然しながら、彼の社會理論並びに共和國に關する考を見んと欲するならば、「リヴィオ論」に觸れなければならぬ。

「リヴィオ論」は二人の共和黨の友人に獻げられたもので、テイト・リヴィオの著はせるローマ史に基き、古ローマの共和政治の發展及び自由都市を説き、國家建設の方法とその内部組織、國家の擴大と外國征服、國家の成長及び崩壞とその組織變革の方法とを論じてゐる。

私は先づ彼の一般社會觀の考察から筆を進めなければならぬ。

四、社會觀

彼の社會觀は自然主義的と云はんよりはむしろ現實主義的印象を我々に與へる。彼は先づ「リ

(16) Literature, Vol. 24, p. 9484. Op. cit., p. XXXV.

(17) 執筆は1512—17年で、未完の儘でおかれたもの。

「ツイオ論」に於いて人間社會の始めに就いて考察し、ローマ史家ポリビウス(Polybius)の思想⁽¹⁸⁾を繼いで、歴史現象の絶えざる循環を説く。

人間社會は一定の順序を以つて永久の變轉を示すものである。人間は本來、惡に走らんとする傾向を持ち、またこれを救つて、善に、秩序に至らしめんとする傾向をも持つ。この秩序への傾向に依つて、ある形式を建てるが、これは亦、直ちに惡への傾向に依つて崩壊せられる如く、循環をつゞけるのである。これが人間社會の一特殊制度たる國家組織にあらはれては、政體の次の如き諸形式の循環變轉をなすことになる。

マキャヴヰエリは、アリストテレスの政體の分類をその儘踏襲して、常態的國家として君主制(Monarchy)貴族制(Aristocracy)民主制(Democracy)の三つに分ち、同時にこれに相對せる腐敗形態として、潜主制(Tyranny)寡頭制(Oligarchy)無政府状態(Anarchy)を認めて、その變遷の過程を次の如く説明する。

人間社會が國家なる團體を作つたことは偶然の事情からである。人口が未だ増加してゐなかつた頃には、人々は諸方に散在して、恰も野獸の如くであつた。然るに人口の増加は群居して、外敵に當ることが最も便宜と云ふことが判り、こゝに團體生活の時期に入つた。かくなれば、彼等の中より最強者を選んで、その長とするやうになり、こゝに國家の第一歩に入つたのであ

(18) 商業と經濟第九年第二册所載、拙稿「後期ギリシヤ及び初期ローマに於ける社會理論とその人々」參照

る。更に文化が進み、法律が設けられるに及んでは、その長たるものには、最も賢徳の人を選ぶ。この人からして、その職は世襲的となり、君主制が確立する。然しながら、この世襲の君主はやがては驕奢に走り、自己の權力を逞しうして、一般の憎惡の的となる。かくなる上は、一般民衆がその怨を報せんことを恐れて、暴力専横を以つて自らを衛らんとして、潜主制へと悪化する。こゝに於いて、富、門閥に於いて優位にある貴族が、かゝる暴君を載くを恥ぢ、民衆を指導し、潜主制を亡ぼし、民衆より推載されて支配者の地位に登り、且つ、一人の政權の壟斷の弊を匡めんとして、貴族相合して、貴族制を作る。然し、この貴族制も亦惡への傾向に依つて、次の代になると、一般民衆の利益を顧みずして、少數者の私利を營むに至つて、これが寡頭制となる。これに對する反對は一人の指導者あれば、民衆はこれに賛して、この寡頭制もやがては民主制に依つて置き換へられる。民主制も暫らくはその秩序を保つことが出来るが、何時かは各人放恣に流れて、無政府状態となる。然るに、また國家がこれで廢滅せざる限り、この無政府状態より救ふものはさきの君主制である。要するに、君主制より起つて民主制に至り、この現象が循環して限りがないのである。

かくの如く、六種の政體中、腐敗形態にあるものは、もとより害あれども、その常態なるものも善ではあるけれども、久しきに互つて繼續し難い性質を持つ故に、利益は少ない。故に、

賢明なる立法者は、これ等の常態的政體の混合せるものをとるべきで、これに依つて最も善く、安定的なる政體を得るのである。(19)

而して、この政治組織の變轉は自然的必然性を以つて行はれる。そして、それは純然たる自然的現象であり、一つの自然的過程であると云ふのである。

この立場に立つて、君主の意義を説いたものこそ「君主論」一卷の論ずるところである。次にこの小冊子の内容を検討することに依つて、彼の社會哲學の本旨を明にしたい。

四 『君主論』の梗概とその論調

この書はオクターヴ版で、凡そ百頁に約められ二十六章に手際よく纏められたものである。先づこの内容は論理的に異なる六部に分類せられる。(20)

- 1、獻題……………ローレンツォ、デ、メデイチへの獻本の辭
- 2、第一章より第十一章まで……………政治に關する君主國の性質
- 3、第十二章より第十四章まで……………國防の手段としての軍備の問題
- 4、第十五章より第十八章まで……………成功せる君主の性格
- 5、第十九章より第二十五章……………國家を安全ならしむる效果ある手段
- 6、第二十六章……………イタリヤを外夷から救濟するの警告

(19) Discourses, Ch. I. 2.

(20) 本文中に於ける「君主論」よりの引用文は Detmold の英譯 Historical, Political and Diplomatic Writings of Niccolo Machiavelli に主として依る。間々、Everyman's Library 所載の Marriott の英譯 "The Prince" を参照した。これ以外

私は先づ以下にこの各部分を紹介することに依つて「君主論」の構成を知らんとする。

1、獻題

この書はピエロ、デ、メディチ (Piero de Medici) の子息なるローレンツォ大公に對し、「その幸運と偉大なる品性とに依つて偉業を成就する」に價値あらしめ、更に、著者マキャヴェリが經驗せる如き「運命の翻弄」を見て以つて、大公に何等か役立ち得るところある希望を以つて書かれ、君主にとつての支配の心得を歴史的に分析したものととして、謙讓な態度を以つて獻本せられたものである。

2、政治に關する君主國の性質

この部分は第一章より第十一章に互つて論せられてゐる。マキャヴェリは本書獻題に於ける主觀的解釋と相反して、彼の政治理論を客觀的事實から推論する。君主國の形式及びその設立方法がその統治の性質を決定する。

專制政治には世襲的のものと、新に設立せられたものと二種類ある。前者たる世襲的君主國 (Hereditary principality) は傳承に依るからして、左程困難を伴はずして統治せられる。君主は專横を行つて、人民に嫌惡せられざるならば、容易にその領土を統治することが出来る。假令、その君主が征服せられてその地位を奪はれるやうなことがあつても、その篡奪者がまた逆轉す

れば、再びその王國を恢復し得るが常である。(21)

これに反し新國家には前者よりも、維持するに種々な困難がある。若し従來、自治を有したる國を併合したならば、その人民はその征服者に對して絶えず叛亂の状態を續けるであらう。而して、その征服者はその民族を滅亡せしめるか、さもなくば自治を許さなければならぬであらう。(22)

新しき君主國は屢々優秀なる才能と恵まれたる機會との合致した結果、獲得せられたことはモーゼ(Moses)キルス(Cyrus)ロムルス(Romulus)テセウス(Theseus)の場合に於けるが如くである。かくの如き君主は、その君主國を獲得するには困難が伴ふが、武力に依るものはその國を容易に持續し、言論に依るものは失敗する。

「それ故に、武力を持てる豫言者は皆成功したが、然らざる者は滅亡したのであつた。……

これはジロラモ、サゾオナロラ(Griolano Savonarola)の経験したところであつた。すなはち彼は民衆が彼を信任せざるに至るや否や、彼の新制度の建設は失敗に終つた。何故なれば己を信する者をして、彼等の信念を確く維持する方法を缺いてゐたからであつた。(23)

唯、運よくも買収に依つて、或はある有力なる帝王からの與へられたものとして、獲得されたる新君主國の場合は、その地位を保つに幾多の困難が伴ふが普通である。一般に「かゝる人々

(21) Cf. The Prince, Ch. 2. 前述の國家形態變遷の説明を見よ。

(22) Cf. *ibid.*, Ch. 5.

(23) The Prince, Ch. 6.

はその高い地位を維持する手腕もなければ、権力も持たない。」

「前以つてかやうな自己の権力の基礎のない者は後日、偉大なる才能と勇氣とに依つてそれを果すことが出来るかもしれない。然し、それはその建設者にとつては大なる困難が伴ひ、その建築物には危険が付き纏ふであらう。」⁽²⁴⁾

一君主國が「邪惡にして非道的手段」に依つて得られたところでは「かゝる手段は人をして帝國を完成せしむるも、榮譽ではないであらう」とマキャヴェリーは觀察する。この場合に於いて、君主は一時にあらゆる邪惡をなして、然る後に、平和な支配に落ち付くであらう。彼はこの種の例を引用して、用意周到に次の如く云ふ。

「別にこれ等の場合の理非を論ずることなく、私はかゝる兇惡手段はそれを模倣することを餘儀なくされた人にとつて充分であると判断する。」⁽²⁵⁾

民選君主國(Civil principality)——叛逆とか暴動とかに依つて得たのではなく、國民の賛成に依つて得られた公國——に關しては「國民に依頼する者は流砂の上に建てるやうなものである」とは必ずしも限らない。これは、君主が自發的國民の繼續的支持に依頼する場合に於いてのみ眞理である。

「それ故に、賢明なる君主は、自己の國民が、常に、又如何なる事情の下に於いても、君主の

(24) The Prince, Ch. 7.

(25) Ibid., Ch. 8.

權威の必要を感じ、その結果、常に君主に對して誠實なるやうな道程を堅實に辿るであらう。⁽²⁶⁾

宗教的君主國 (Ecclesiastical principality) は幸運又は勇氣に依つて得られるが、それを維持するにはそのいづれをも要せず、教會の權威に依つてゐる。——君主の行爲が如何であらうと、何等關するところではない。

「何故なれば、かゝる國は神意に依つて建てられ、支持されてゐるからで、如何なる人も濫りにこれを論議するのは大膽な、僭越なことゝなるであらうからである。」⁽²⁷⁾

それにも係はらず、教會がこの俗界のことにそれ程、勢力を持つやうになつたかを訊ねるものがありとすれば、陰謀的なる君主が、教會の爲めにしたことが、俗界を抑へてしまつたと云ふことを歴史は我々に答へてゐる。

3、國防の手段としての軍備の問題

この部分は十二章から十四章に至る三章に亙る。國家の安全なる基礎は善き法律と充分なる軍備との二つである。法律が善きことは、理論上優ぐれてゐると云ふ點にあらずして、ある所定國家の安寧を維持し、且つそれを増進せしめ得る理由の下に於いてゐる。軍備の完備とは軍隊が公衆保護の有力なる機關であることを前提とするのである。

(26) The Prince, Ch. 9.

(27) The Prince, Ch. 11.

イタリヤ共和國の軍隊組織の著しき弱點の一は傭兵に依頼せることであつた。その制度に對して、マキャヴェリーは容赦なき論法を以つて、罵つてゐる。

「傭兵及び他國の援兵は兩者共無用にして、危険である。而して、何人も傭兵の下に自己の國家を建設せんと企つるならば、國家は決して、堅固でもなく、安全を保つことも出來ない。傭兵は統一を缺き、野心滿々たり、又、訓練なく不忠實で、友人同志間では勇敢を装ふも、敵に對しては臆病で、神を怖れず、人に忠實といふこともないからである。……これが眞なるを示すは何等困難なことはない。現にイタリヤの滅亡は、多年、傭兵に依頼してゐた事實以外に、何にもあり得ないからである。その傭兵の指揮者が有爲の材であるか否かである。若し彼等が有爲の材ならば、彼等を信することは出來ない。何故なれば、彼等の主たる目的は常に傭ひ手たる君主を壓倒することに依つてか、或は君主の意嚮以上に出て、他を抑へ付けることに依つてかして、自らの勢力を得んとするであらうから。而して、若しその指揮者が無能であるならば、慥かに君主の滅亡へと急ぐことになるであらう。」⁽²⁸⁾

有力なる同盟國に依つて送られた援兵も等しく信頼し難いものである。「この種の軍隊は、軍隊そのものは有力で、善良であるかもしれないが、然しその軍隊を借り入れる者にとつては常に危険である。何故なれば、若し敗ければそれまであるが、勝てば

捕虜の如く、君主はその軍隊の権力内にあるから。」これを要するに、備兵に就いての危険は彼等の臆病と悪き忠實に存するが、他國よりの援兵に就いては、その勇敢が危険を生せしめるにある。それ故に、賢明なる君主は常に彼等のいづれをも備ふことを避け、自己の軍隊に専ら頼るべきである。そして他の援軍に依つて得た勝利は、眞の勝利を得ない故、それはむしろ敗けた方がましである。⁽²⁹⁾

「然らば、君主は心に他の考や、目的を持つより、又、他の事に彼の特殊研究を向けるよりは、むしろ戦術及び彼の軍隊の管理、訓練を考慮すべきである。……軍備よりも安逸を希ふ君主はそれに依つて國を失ふ。」「賢明なる君主は平和の時代にも決して怠けず、勤勉以つて苦境の時代に役立てんが爲めに準備すべきである。さすれば、幸運が君主を見捨てた場合に、彼はその打撃に對抗すべく準備されるのである。」⁽³⁰⁾

このマキャヴェリーの「準備説」こそ當時のイタリアの國民的危急の産物でなければならぬ。

4、成功せる君主の性格

これは第十五章から第十八章までの部分に述べられてゐる。マキャヴェリーは本題に對しては、先きに述べられたる議論と同一の率直さと冷靜さを以つて、臨んでゐる。フィレンツェ

(29) The Prince, Ch. 13.

(30) The Prince, Ch. 14.

救済の事以外に何も無い。愛國的情熱は隨所にあらはれてゐるところである。

この問題に就いては、古來屢々論議せられたところであるが、それ等の一般の見解から離れて、別箇の意見を述べることの危険には彼は自ら氣付かざるところであつた。

「然しながら、私の意嚮は、私の言葉を解して貰ひたい人に有效であると思ふこと若干を書くことであるから、同一物を單に思索に耽けるよりは、むしろ事物の眞理を追求するのが私に適するやうに思はれる。何故なれば、多くは實際に存在したことのなかつたやうな共和國や、君主國を想像してゐたからである。人間が生活してゐる方法は、人々が生活すべきである道からは遙に異つてゐるので、それが爲に、自分が従ふべき常道を離れてゐる者は、それが君主に身を全うするよりも、むしろ滅ぼすことを知るであらう。すべての點に於いて、彼の地位にのみ正直に生活する人は、邪惡なる人々の間に交つて、「滅ぼされ勝ちであらうから。それ故に、自己を守らんと欲する君主は、常に善たるを心がけずに、必要に應じ、善たることも、善たらざることもしらなければならぬ。されば、君主に關して想像的の事物を避け、現實にのみ限れば、すべての人々には……：毀譽褒貶をもたらず或る性質を認めると私は云ふ。」⁽³¹⁾

次に、徳及びこれに對する不徳を數へ來つた後に、彼は更に語を繼いで、

「私は思ふに、世人の賞讃を博するところの、上記の性質すべてを所有することは君主にとつて最も褒むべきことであらうが、然し、これ等すべてを持つことは不可能であるし、或は履行することも全く出来ないことであるから、……すくなくとも、君主を自己の國家から奪ふ如き惡徳の不名譽を如何にして避けるかを知ることには充分慎重であるべきである。……何故なれば、一切の事物を考ふるに、徳の如く見ゆるものも、これを實際に行へば、身を滅ぼすやうなものを見出すし、又、一方には外見、惡徳に見えても、實行すれば、君主の安全、福祉の結果を來すものもある。」⁽³²⁾

これ等を例證すれば、

(a) 「君主が寛大なりと思はれるのはよろしいことである。然しながら、寛大も最早何も恐れざる程に放任であれば、却つて有害であることが判るであらう。何故なれば、普通であるべき程度に寛大が適當に行はれた場合、それは却つて認められず、正反對の非難を君主に加へるであらう。それ故に、君主が寛大であると云ふ名譽を欲するならば、多大に費用を要さなければならぬ。それが爲に、君主はかくして一般に彼の全資産を蕩盡するであらうし、又、遂には彼の寛大に對する名譽を維持せんと欲するならば、人民に非常な重荷を課し、又、金を得んが爲に税金に頼より、その他あらゆる方法に頼るを餘儀なくする。この事は彼をし

(32) The Prince. Ch. 15.

て、間もなく自ら人民の嫌惡を招くに至るであらう。而して、又、君主が貧困にでもなる場合に、自己の濫費に依つて多數を害ひ、利したものは殆んどないので、彼はあらゆる不便を蒙るべき最大のものとなり、あらゆる危険に曝らされるであらうし、而して又、彼がこれを意識して節約せんと試みる場合に、彼は直ちに守錢奴呼ばりをされるであらう程に、種々の人々に依つて責められるであらう。」

これに反して、若し君主が吝嗇家であると云はれることを恐れず、且つ、

「自分の慎重さと經濟とに依つて、自分の収入に満足するならば、而して又、戦争の場合に防禦の準備たることが出来、人民に負擔をかけることなくして、事業に従事出来るならば、君主は寛大と考へられるであらう。……それ故に、君主は寛大なりと呼ばれることを心がけて、思むべきことゝ又、不名譽とをもたらず貪慾の評を已むなく受けるよりは、むしろ憎しみを受けずして、謗りを受けるところの、吝嗇呼ばりを甘受するが賢明である。」⁽³³⁾

(b) 「いづれの君主も慈悲深くあると云ふ名聲を欲すべく、殘忍であると云はれてはならない。同時に彼はこの慈悲を誤用しないやうに注意すべきである。……それ故に、君主はその臣下を統一せしめ、又忠實ならしめる場合に、殘忍なりとの惡評を意に介してはならない。何故なれば、苛酷さが數人のものゝ不興を招いても、餘りに溫和に失することに依つて、強

奪、謀殺を招き勝ちなる不秩序を來すよりは一層慈悲深いのである。何故なればこれ等のことは全社會を害ふのであるが、君主に依つて命せられたる逐行は少數の個人にのみふりかゝるからである。」然らば、これは畏れられるより愛せられる方がよいか、或は愛せられるより畏れられる方がよいかの問題を生ずる。兩者のあるを欲することは當然、答へられるが、然し、同時に兩者のあるのは困難であるからして、兩者中の一を選ばなければならぬ場合、愛せられるよりも、畏れられる方が一層安全である。」

我々が、こゝに一つの假定的問題を考へ、事態の急變——例へば強盜が襲ひ來つて、我々に危害を加へんとして刃物を擬した如き——が起つたときのことを考へてみると、その場合、愛と憎しみといづれを選ぶか、マキャヴェリーの答たるやかくの如く明かなものであつた。

「然しめがら、君主はその人民の愛を獲ち得ないまでも、すくなくとも、憎しみを起させない程度に自分を畏れしあるべきである。何故なれば、若し、君主がその人民の財産とその婦女に手を觸れるを慎むならば、畏れることあつても、憎まれることはない。而して、若し、何人でも、その生命を奪ふべく餘儀なくせられたならば、それに對して明示し得る原因と、正當なる理由とある場合にのみかくなすべきである。何故なれば人々はその父の死は割合早く忘れるが、その財産の失はれたことは仲々忘れないからである。」⁽³⁴⁾

(34) The Prince, Ch. 17.

こゝに、我々は社會統制の一方法として、暴力に關する傳統的主張を赤裸々に聞くを得たのである。例へば子供を訓育するに當つての、こらしめや、犯罪防止の一手段としての威嚇や、公衆道德の利害と相反せる論を抱くもの、禁錮等の社會統制に見られるところである。

(c) 「君主が奸計や瞞着を用ふるよりは、常に信義及び實行上誠實を守ることがむしろ賞讃する價值あることは何人にも明かであるに違ひない。しかも、現代の經驗では信義を餘りなせず、他の智者を欺く爲に奸智に立廻つた君主は大業を成就し、遂には忠實に信義に依つてその行動をしたものを負かしてしまつたことを見る。それ故に君主は、戦ふに二つの方法のあることを知らねばならない。一は法律に依り、他は暴力に依る。前者は人間に依つて用ひられ、後者は動物に依つて用ひられる。而して、前者のみでは往々不充分なる故に、後者を用ふることの必要が生ずる。

「然らば、君主にとつては動物の性質を如何に使用するかを知ることが必要で、君主は狐と獅子との兩者の性質を装ふべきである。何故なれば、獅子は畏を避けることが出来ないが、狐は狼に對して、それを防ぐことが出来ないからである。君主は畏を知る狐たるべく、又狼を畏れしむる獅子たるべきである。何故なれば、唯、獅子の性質のみを有する君主は自己の仕事を了解してゐないからである。

「そこで、機敏なる君主は彼等と約を守ることが自己の利害と相反する場合、又、彼の信義を誓ふに至つた原因が最早存在しない場合、彼の約束を果し得ず、又果すべきでない。若し、人が悉く善良であるならば、この教へは事實悪くなるであらうが、然し人間は本來、悪く、君主に對してその信義を遵守しないであらうから、君主は同様に、彼等に對して、その約束を守る必要はない。如何なる君主も未だ曾つて、その信義の缺けてゐるのを尤もらしくする合法的の理由がなかつたものはない。近代に於ける無数の實例をこれに與ふことが出来る。如何に多くの平和條約、如何に多くの契約が君主の背信に依つて無効にされたかを容易に見ることが出来る。如何に狐たるかを最もよく知れる君主が最も成功を收めてゐる。……」

：君主は慈悲深く、信義があり、人間的で、宗教的で、正直であるやうに思はれるべきで、又、實際にさうあるべきである。……（然し）運命の風及び變化が彼に命ずるところに従つて、容易に變へ得る變通自在の心を持つべきである。又、上述の如く、出来るならば、善から脇道へ外れないやうにし、已むを得ざる場合、如何に悪を用ふるかを知つてをるべきである。

「そこで、君主の行爲は、その動機よりも外觀的結果から判断されるのであるから、君主がその國家を保持せんが爲に、適當な手段を採つてよろしい。君主がこれに採つた手段は、常に

名譽ある事と思はれ、各人に依つて賞讃せられるのである。」⁽³⁵⁾

これが有名なるマキヤヴエリーの權謀術數論であり、後の所謂マキヤヴエリー主義(Machiavellism)の名もこゝに起源を持つのである。彼が、悪評、誤解を受けるのも、この章に於いて最も著しいものがある。

5、國家を安全ならしむる效果ある手段

この部分は十九章から二十五章に至る六章に互つて論せられてゐる。こゝでの一般的問題は君主は國を維持するに當つて、無法の方法を用ふることを如何にして、避けるかと云ふことである。

先づ第一に、君主は自ら憎まれ、咎められることを避くべきである。

「かくすれば、君主は尊敬せられる故、何人も彼を欺き、背かんと思ふ者はないであらう。……君主が恐れなければならぬものは二つある。一は内、人民の叛亂と、他は外、有力なる外國人の攻撃である。外敵の侵略に對しては、君主はよき軍備とよき團結一致とに依つて、これを防ぐことが出来るであらうし、よき軍備ある者は、よき團結を齎すであらう。而して、國外の事が全く靜穩である限り、國內の安全も陰謀に依るにあらざれば、亂されることはないであらう。」

現時の國民中にも、フランスは議會を創始することに依つて、國內の問題も最を善く解決した。

「何故なれば、この王國の建設者は貴族の野心及び不遜を感知し、彼等を牽制するの必要を悟つたからである。彼は同時に、人民が貴族に對する畏れより、貴族を憎惡するに至ることを知つた。兩者を結び付けんを欲して、然も、王の特別な配慮を好まず、人民の味方をするに貴族に思はれる責任と、貴族を助けると人民に思はれる責任とから救はれる程度に、彼は王と關係なき第三者としての議會を建て、強きを抑へ、弱きを助けるのである。王及びその國土の安全を計るものとして、これ以上の賢明なる制度を求めることは出来なかつた。」⁽³⁶⁾

國外の安全の問題に關しては、彼は國民軍及び一致團結せる人々に見出される強さにありとの彼の信念をこゝに再び斷定してゐる。⁽³⁷⁾

更に性格をして抑壓するよりは、むしろ、表示せしめんとする近世的考へ方とマキャヴェリのそれとは全然合致するところがある。

「凡そ、君主をして偉大なる計畫をなし、彼自身の人柄の高尙なる模範を示すほど尊敬せられるものはない。」

こゝで彼はスペインのフェルデナンド (Ferdinand) の例をとり來つて、歴史的説明を與へる。

(36) The Prince, Ch. 19.

(37) Cf. *ibid.*, Ch. 20.

「かくの如く、彼は常に、臣下をして心配、讚嘆せしめ、その成行に心を費すところの大なる計畫を目論み、而して、それ等の困難なる計畫は矢繼早に一から他に移り行くので、人々に、彼に對して落ち付いて何等の攻撃をなすの機會を與へなかつた程であつた。」

更に、次ぎの論調の如きは、骨子としては近代的の響きを持つものである。

「輔弼の臣の選擇は君主にとつて、すくなからざる重要さを持つものである。君主が銳きか、否かに従つて、輔弼の臣も善きか否かである。君主自身の才能の第一印象は、君主をとりまく人々の性格に依るのである。若しも輔弼の臣等有爲の材にして、忠實であるならば、君主は賢明と考へられる。何故なれば、彼等の有能なるかを如何にして識別するかを、又、彼等の誠忠を如何にして得るかを知つてゐたからである。然し若し彼がこれと反對の者であることが判れば、そのときには、君主に對して持つた意見は、君主が彼等を選ぶに當つて判断が缺けてゐたが故に稱讚を得ることに至らないであらう。」⁽³⁷⁾

それ故に、君主は輔弼の臣に就いては細心の注意を拂ひ、阿諛を避けるべきである。

「賢明なりとの名聲ある君主は、君主自身の天賦に負ふよりも、彼をとりまくよき輔弼者に俟つと想像する者はたしかに自らを誤るものである。何故なれば、本來賢からざる君主は偶々、萬事に君主を導き、非凡の才能の人たるべき一人の者の手に全然自己を任せてしまふにあら

ざれば、よく忠言を聴き入れることが出来ないことは、一般に誤りなき原則と見られ得る。かゝる輔弼者のあつた場合に、君主はよく指導され得るかもしれないが、恐らくはその輔弼者はやがて、その國を奪ふであらうからして、永續きはしないであらう。⁽³⁸⁾

最後に、マキヤヴェリーは人事は如何に運命と神の力に左右せられるかを論じ、我々の行動は半ばはそれを運命に歸するが、同時に他の半ば、若しくはそれよりもやゝ少くは、人間の自由意志にあることを認めねばならないと云ふ。それ故に、これ等の要素を無視する君主は賢明ならざるものである。

「運命に全然頼れる君主は運命の變化に連れて、滅びるであらう」が、然るに「時代精神に行動を順應せしめる君主は運よくなるであらう。而して、同様な方法に於いては、若し君主がその行動に於いて、時代精神を無視せるならば、不幸となるであらう。」⁽³⁹⁾

6、イタリヤを外夷から救済するの警告

これは最後の章たる第二十六章のみに書かれたところである。著者はこの章に至つて、その筆致も情熱的に、ローレンツォ、デイ、メデイチに對し、イタリヤ救済を懇願せるものである。上述し來つたところは一般的考察であつたが、本章に於いて、マキヤヴェリーは敘述の態度を變へ、當時のイタリヤに對する關心の一層強調せられてゐるのを見る。彼が第二十六章の始めに

(38) The Prince, Ch. 23.

(39) The Prince, Ch. 25.

述べるところに依れば、

「現時、イタリヤ精神の勇氣を發揮する爲には、イタリヤがかく現在の窮境に陥り、嘗つてのヘブライ人のそれよりも、更に奴隸の境遇に苦しみ、嘗つてのペルシヤ人のそれよりも、更に壓制を受け、嘗つてのアテネ人のそれよりも更に分裂し、主權なく、秩序なく、打たれ、奪はれ、破られ、侵略され、そしてあらゆる荒廢に耐へ忍ぶべきことが必要であつた。

「近く二三の者が立つて、その輝きを示さんとし、イタリヤ救済の爲に神より遣はされたかの如く思はしめたが、その花々しき生涯の真中に於いて、運命の拒むところとなつた。それが爲、イタリヤは死せるが如く横はり、その傷を療し、ロムバルディア、トスカナ、ナポリ等の長きに亙つて被れる慘害を一掃する如き者の出現を待つことの切なるものがある。これ等の慘狀及び蠻夷の傲慢不遜よりイタリヤを救ふべき者を神に送らんことを望むの情や切である若し、いま旗をとりて進むものあらば、イタリヤは直ちにこれに集まらんとする有様である。」

彼に依れば、今やイタリヤの絶望の底にある運命を救ふべき偉大なる好機が到來せんとしてゐる。國民軍は備はり、正しき動機の下に於ける正義に依つて鼓舞せられ、史上、如何なる偉人が彼等の國家を救つたかに關しての知識を持つて、「神及び教會より恵まれたる」メデイチ家

がこのイタリヤを救済することの成功を、如何にも確信にみちて、愛國的の情熱を以つて述べてゐるではないか。

「殿下は、イタリヤが長い間待つて遂にその救済者の現はれたのを見たる機會を逃してはならない。長い間、外敵の殺到に苦しめられてゐた諸國は如何なる感動を以つてこれを迎へるごか、——如何に外敵に對する復讐を渴望するか。如何に撓まぬ信義を以つてするか。如何に獻身的に、如何に涙を流すか——到底、云ひ表し得るところではない。君主に閉ざさんとする門戸は如何なるものがあるか。君主に服従を拒むものがあるか。如何なる嫉妬も君主に反對し得るものがあるか。イタリヤ人が君主に臣服せざるものがあるか。我々のすべてにとつて、この外夷が鼻につくのである。

「希はくば、殿下の光輝ある家門を以つて、正にこの大業を遂行するの勇氣と希望とを以つて、このことを擔當せられよ。かくして、殿下の旗下に我が國は古代の榮譽を恢復し、殿下の庇護の下に次ぎのペトラルカの言葉を實現せられ給へ。

德義は狂暴に對して、歳器を執つて起ち、かくて、爭亂間もなく止まん。

蓋し、古のローマの勇氣は未だ亡びず、イタリヤ人の胸の中に消えざる故に。

Virtù contro al Furrore

Prenderà l'arme, e fia il combatter corto

Che l'antico valore

Ne gli italici cuor non è ancor morto.]

六、マキャヴェリー批評

マキャヴェリーの思想は「君主論」其他が世に公にされて以來、既に四世紀、その間、人を異にし、時代を異にして、幾多の論評が發表されてゐる。恐らく、マキャヴェリー程、多種多様の言葉を以つて評價され、批評された者はまたとないであらう。私はこゝに、年代を追ふてこれ等の有力なる評論を紹介する暇を持たないが、次ぎにその要點を概括し、批評するであらう。

マコロー (Macaulay) はマキャヴェリーに關する彼の論文中に述べて曰く。

「彼と同時代に生活せる人々が彼の著作中に何ものか衝動を與へるものを見、或は不調和の點を觀て、如何に考ふることあるとも、それは何等の理由にならない。彼の著作と人となりの二つながらが、同時代の者の中の、最も尊敬すべき人々に依つて高く評價せられたる幾多の證據を留めてゐる。クレメント七世 (Clement VII) は次ぎの時代に於けるトレント會議がキ

リスト教徒が閱讀するは妥當ならずと發表したこれ等の書籍の出版を保護した程であつた。民衆黨の一派はメデイチの不人氣なる名を持つた一個人に對して、「君主論」を獻じたこの秘書官を非難した。されど、後にかゝる非難を蒙つたこの不朽の學説は、當時にはその儘受け入れられたやうに思へる。この非難の聲は先づアルプスの彼方に起つて、イタリヤにては意外の驚きを以つて、聞かれたやうである。⁽⁴¹⁾次にモーレーの言に就いて見よう。

「十五世紀以降の、長きに亙る烈しき鬭争の中にマキャヅヱリーは敵對的信念の中に在りて、又市民政府に於ける鬭争的勢力の間に介在して、兩方面より憎惡せられ、攻撃せられたのであつた。教會に於ける生活、而して又、國家に於ける生活の新形式への一大飛躍に當つて、彼の名は、新舊兩派が等しく共に忌み嫌ふと公言してゐたところのものを代表してゐた。先づ、若し教會が保護を與へなかつたならば、彼の著作を默許したであらうに。然し間もなく、一方に於いてはドイツに於ける宗教改革と他方に於いてはイタリヤに於ける異教徒的な文藝復興との二重の壓迫の下で、新しき印刷術を恐れて、今や一五五七年に至つて始めて、表面にあらはれて來たところの禁書目錄に彼を載せたのであつた。彼は早くも信義と真理の、教會を離れんとする、異教的な、邪惡な、不敬神の徒輩として公然と非難されるに至つた。彼

(41) Critical Historical and Miscellaneous Essays and Poems, Vol. I, p. 196.

は自己の藁人形を作られて、それを火刑にされた。彼の書物はサタン自身の指で書かれたものとして、非難された。十六世紀に於いて彼に對する罵詈ほご學者の間にも、無學者の間にも、これ以上に甚しかつたことはなく、死んだマキヤヴェリーは彼の奔放な言葉に對する充分な非難を甘受したのであつた。ヴォルテール (Voltaire) がダンテに就いて、彼の名聲は、何人も彼を讀まざるが故に、全きを得ると云つた如く、それとは逆の意味に於いて、マキヤヴェリーが悪評は、人々が非難を加へ論駁し、呪咀するが、然し決して讀まれざる故に、益々悪くなつて來たのであつた。

「舊教徒はローマ法王の敵として彼を攻撃し、又た新教徒は彼が原始キリスト教會の信仰や教義の復興に心を盡せずして、古代ローマ精神の復活を目指したるが故に、彼を攻撃した。これ等兩派が彼を罵倒してゐる間に、舊教徒と新教徒とは互に一方をマキヤヴェリー主義者として誹謗するところがあつた。フランスにては有名なるイタリヤの皇太后に反對した國民的偏見は又、マキヤヴェリーに當り散らした。理由とするところは、彼の書物はカタリナ、デ、メデイチ (Catherine de Medici) の豫言たるべく公言されたことにあつた。そのカタリナの父に彼の書物は獻せられたのであつた。それはバーソレミュー (Bartholomew) の虐殺やユグノー (Huguenot) の戦争に責任を負はされたのであつた。スペインに於いては反對の理由が擧げ

られ、而して、何處に於いても暴力の擁護者として非難された彼は、こゝスペインでは宗教改革の敵で、かの奇怪なる市民の信仰の自由の擁護者として嫌悪された。英國にては、王黨は彼を呼んで無神論者となし、清教徒は彼を呼んでジエスキット派となした。近代ドイツの評論家はエリザベス朝文學中マキヤヴェリーに關する三百九十五の參考書に目を觸れたが、それ等の書たるや、すべて彼を以つて、惡魔の奸計と惡意と偽善となしたものであつた。……惡評が立てられた時は何時でも、それはマキヤヴェリーに投せられた嘲罵であり、又、彼自身の惡評は惡人に加へられた嘲罵の中で最惡のものと思はれた。⁽⁴¹⁾

この非難と憎惡に對する反動として、殆んど誇大の極言とも云ふべき迄の好意的な批評が一方には加へられてゐるのを見る。更にマコローに依れば

「マキヤヴェリーのそのの如く、公共善に對する熱意のかくも純心に、濫かに情操の高きを表はし、或は又、市民の義務並びに権利の見地をかくも正しくあらはせる著書を我々は殆んど知らない」と云へば馬鹿らしく思はれるかもしれない。然もそれはその通りである。⁽⁴²⁾

モローも亦、「ヘンリー八世の有力なる大臣、トゥマス、クロムウエル(Thomas Cromwell)はポール大僧正(Cardinal Pole)にプラトンの如き夢想家は打捨て、統治の方法を實際に取扱つたよき考の持主たる一イタリヤ人の物した新しき一書を讀まれよと勧めた」と云つてゐる。

(41) Romanes Lectures, Machiavelli, pp. 6—8.

(42) Critical, Historical and Miscellaneous Essays and Poems, Vol. I, p. 195.

モーレーは更に進んで、「マキヤヴェリーの俊髦にいたく引き付けられた」ペーコンに就いて次の言あるを引用してゐる。「我々は人のなすことを書き、そして、なすべき筈のことには書き及ばさなかつたマキヤヴェリー及び其他の人々に對して負ふところが多い」⁽⁴³⁾と。而して、モーレー自身のマキヤヴェリーに對する評價は、次の如く述べられてゐる。

「彼は散文書を持つことの出来るすべての最高の效力を具へてゐる。——彼は單純で、ありの儘で、直情で、快活で、而して理性的の人である。彼はあらゆる種類の寸鐵人を刺すが如き諷刺を持つてゐる。その諷刺たるや文字通り正確に述べてあるものにして、諷刺と云はんか、質朴と云はんか何れもたしかなものではない。彼は自己の思想を事實から巧みに鮮かに捌いたので、それは殆んど明々白々たるものがある。含蓄ある精力に、唯一つに集中せられたる言葉を投げて、彼を凌いだ者は何人もなかつた。或る頁に就いては錐の先きで書かれたものであるとはよく云はれたのであつた。彼は稱讚と非難との無遠慮な、易々と用ゐられる語句を餘り用ゐてはいない。彼は屢々、悲しまず、喜ばず。彼は微笑みもせず、又叱咤もしない。彼は滅多に憤激の色を示したことはないし、又彼は決して物に動することはない。彼は人間の優柔不斷を制することを勧めようとはしない。彼の仕事は疾病の性質、適當なる治療法、恢復期を説明する臨床講義のそれである。彼は因襲や陳腐のなびける着物を脱ぎ捨て、同情

(43) Romanes Lectures, Machiavelli, p. 9.

感情に對して彼の心を閉し、外科醫の手術に於けるが如く、相容れざる憐愍を無視する。」⁽⁴⁴⁾
 マキャヴェリーの遺骸は今はフィレンツェのサンタ、クロース教會(Santa Croce)のミケラン
 シヒロ(Michael Angelo)やガリレオ(Galileo)の墓の側に眠つてゐる。彼が功績を記念する爲め
 に建てられた記念碑上の浮彫には次の數言が刻されてゐる。

「如何なる稱讚もかゝる偉大なる名聲に及ばざりし。」

イタリア政府は彼の偉大なる功績を認めて、ローマのピンチオ公園(Pincio)に彼の胸像を
 建設し、一八六九年には彼が一生涯の居地としたヴィア、ギチイアルディニ(Via Guicciardini)
 の素朴な家に一つの扁額が掲げられ、それに次の文が刻されてゐる。

ニコラス、マキャヴェリーに獻げる。

君は國家統一の剛毅なる豫言約先驅なりし。君は冒險的場中にありて、

イタリア最初の設立者にして統治者なりき。統一なり、軍備なれるイタリアはこの扁額を、

一八六九年五月三日第四百年祭に掲ぐるものなり。⁽⁴⁵⁾

*

*

*

*

*

*

マキャヴェリーの人格と業績とに加へられたこうした痛罵と讚辭との間の懸隔の甚はだしき
 に對して、我々は何れの論者の動機をも非難することは出来ないし、又、事實眞摯な態度を以

(44) Romanes Lectures, Machiavelli, pp. 20—21.

(45) Detmold, Op. cit., p. xli.

つて論評せることであるからして、何にかそこに矛盾が存しなければならぬ。思ふに、かゝる大いなる兩者の相違は、その何れか一方が、或は恐らく兩者共に彼を誤り解釋したことに歸因するのであらう。

彼を論難した人々は何等の確たる根據もなく、「君主論」はマキヤヴェリーの、社會哲學、政治哲學一般を示せるものと考へた。然るに、實際には「君主論」に述べられてゐることは、畢竟するところ、一五一三年に於けるフイレンツェの特殊な陰謀的狀態にあつた社會に生活せる人々の行動を分析したものである。故に、一般社會に無制限に適用せらるべき理論ではない。この特殊理論を一般理論と考へるところに誤解の基があり、論難攻撃が生まれるのである。

然るに、彼を推奨し、擁護せる人々は、この考へ方に反して、歴史の豫見に關する彼の見解の價値を買ひ被り過ぎたものである。

「君主論」の殆んど各頁毎に、この著者は論議を盡して、この理論の普遍的に適用せられることを拒んでゐる。それ故に、マキヤヴェリーが、信義を破ることを一美德であるとして勧めたこと、更には、彼が君主の大望を煽らんとしてゐたことなどを、枚擧することは固より誤れることである。

イタリヤの法律家にして、文學者である一知名の士に依つて、マキヤヴェリーに對する非難

の理由なきを示さんが爲に、彼の數多の著作から格言に類するものを編纂された小冊子「一政治家の思想」⁽⁴⁶⁾ (Thoughts of a Statesman) から二三を引用すれば、これ等の主張が更に確められるのである。

第一章、宗教

「企てんとするすべての計畫は神の名の爲、又、國家の一般的利益の爲になさるべきである。」
 「神を畏敬することは政府に依つて企てられるあらゆる計畫を容易ならしむるものである。」
 「宗教の存在するところ、すべての善は先づあり得べく、而して宗教を缺くところ、すべての惡は先づあり得べきである。」

「神に對する信仰の遵守が國家の偉大の基をなすが如く、神を無視することは國家壊滅の基をなすものである。」

「よく組織立てられたる政府にあつては、國民は法律よりも、誓言を破ることを恐れる。彼等は人の力よりも神の力を尊ぶからである。」

「宗教が始祖たる神に依つて設立せられたるが故に、若しキリスト教共和國の政府すべてに於いて、宗教が維持せられるならば、國家及びキリスト教共和國は現在よりも、より以上に統一され、幸福になるであらう。」

(46) この書は1771年に法王廳の檢閱官の認可を受けて、ローマに於いて印刷されたものである。

「あらゆる信仰とあらゆる宗教を無視することは多くの面倒と測られざる不秩序とを招來する。」

第二章、平和と戦争

「善良にして、賢明なる君主は平和を愛し、戦を避けるべきである。」

「軍備は他のあらゆる手段が不充分なる時の、絶對絶命に備へる爲に留保さるべきである。」

「何等かの人道觀念を持ち合せてゐる君主は、自己の臣下の間に悲しみの波及する戦勝を全く祝ふことは出來ない。」

「権力と國家の増大はそれと共に、敵及び憎惡の増加をもたらすもので、戦争と災害の一定不變な禍根も亦さうである。」

「統治する者の自由意志に依る政府のみは持續する。」

「大望に依つて盲目にせられてゐる人は彼の上り得る高所まで登るも、又必ずや悲惨なる墜落の用意をするものである。」

「戦争に於いてさへ、與へられた誓言及び爲された協約を破棄せしむるところの詐欺的手段からは、如何なる榮譽も殆んど導かれるものでない。」

「同盟國は利益なると危険とに關せず、契約された信義を提起すべきである。」

第五章、法律

「法律に依つて拘束されてゐない人は何人も、拘束されざる暴民と等しき誤りを犯すものである。」

「善良なる道徳を保持するのは善良なる法律を必要とするが如く、善良なる法律を維持すべき法律は善良なる道徳を必要とする。」

「人を善良ならしむるものは法律である。」

「よく組織されたる政府にあつては、法律は公共の爲に作られて、少數の野心家を満足せしむべきものではない。」

「如何なる法律も公共契約の信義を汚すべきものではない。」

第六章、理想の君主

「人間らしく、溫柔なることは、殘忍、虚勢、淫蕩を示さず、且又、人の生活を汚す惡徳を見せずして、それは君主に對し榮譽、勝利、名聲を持ち來すであらう。」

「誓約を守り、廉潔に住み、邪智と欺瞞なき君主を如何に稱讚すべきものなるかは各人の知るどころである。」

「君主に依り臣下に對し誓約されたる公の信義は神聖にして犯すべからざるものである。」

以上の所説に依つて見ても、彼の説は自己の政治的信念の理想と主觀的要素とを述べたものである。これ等は人がなすべきことであり、又あるべきことでもある。「君主論」及び「リヴィオ論」にあらはれた彼の學説は、人は何をなし、如何にあるかの見地に立つて思ふところを記したものである。それ故に、彼は先づ、政治と倫理との極端にまで區別せられた、當時のイタリヤを直視する。數世紀間、政治思想は神學の副産物であつた。而して政治問題は本質に於いて本來が宗教的問題と混同されて來た。マキヤヴェリーの意識の上に、道德原則を政治的存在と福祉との必要の前に従たらしめてゐることが明瞭になつた。彼は國家を以つて、明かに人爲制度と見做し、又教會を以つて政治家が自己の政策を形成する點に於いて考慮しなければならない諸要素の一であると見た。國家の安全と成功とは主要なもので、爾餘の一切の考察は従たるものであつた。

さればこそレオポルト、ランケ(Leopold Ranke)もその若き時代の勞作中に、「マキヤヴェリーはイタリヤを救濟せんと努めたが、而も、彼にとつてその状態は餘りに絶望的に見えたが故に、勇敢にも彼は毒藥を處方したのであつた」⁴⁷⁾と説く。我々はイタリヤが腐敗したことを見たのであつた。事實、政治は道德より分離し、而も宗教も亦さうであつた。陰謀、叛逆、詐欺的行爲

は公的、私的の兩生活にあらはれ來つた。

それ故に、「君主論」は事變危急の處置たる目的の爲には手段を選ばずと云ふ理論上の一學說を否認しながらも、實際は追求してゐるのであつた。我々は、止むを得ない、仕方がない故にこの理由に依つて、往々我々の行動を説明せんとする弱點を持つてゐる。

「従つて、君主の行爲と國家の政策には普通道德の標準よりも一層深き標準が適用される。適當なる權力と絶えざる發展とに依る自己保存は最高の法律である。溺るゝシヤムの女王が、その神聖なる身體に手を觸るゝことは冒瀆たるが爲に、溺るゝにまかせられたが如く、社會秩序が道德的理由の故に正に崩壞してもよいとは云へないであらう。」⁽⁴⁸⁾

イタリヤが外敵の危難から脱し、統一と平和とが恢復した曉には、人々は平和說に賛することになるであらうが、マキャヅエリーの時代の混亂せる状態では到底望まれないことであつた。我々の政治理論及び社會理論が動もすれば假定的で理想的であり勝ちなのを、實證的にして、かくも我々に種々なる意味の衝動を與へた書籍はまたとないであらう。善を招來せんが爲には、惡事をなしても常に正しいと云ふことを我々は否定するに拘はらず、支配に對しては個人道德も公共道德も共に例外であることを以つて正當なりとする實例を記すには相當大部の冊數を必要としたであらう。我々は自己防衛に於ける殺人を是認する。公安の爲に止むを得ざる行動は、

(48) Giddings, Studies in the Theory of Human Society, pp. 105—6.

これを罰せざることを認める。古來、戰爭は社會をして道德的意識の矛盾を感せしめ、何億人の生命をして、酸鼻を極むる死の淵に陥ることを餘儀なくせしめながらも、「統一の爲に」「正義の爲に」「世界をして民主政治の安住の地に置き」とか、果ては「最後の戦」などと稱して、これの理由づけをしてゐる。正統派キリスト教に於いてすらも、神の子の殉教は世界を救はんが爲に神の正義に依つて用ゐられた手段であつたと信じてゐる。これが我々社會の實狀である。

マキャヴェリーの缺點はこの學說を何等の辯明もなく採り入れたことであり、單刀直入的に書いたことである。因襲的な標準の羈絆から脱し、彼の考へ方が觀察と經驗とに基礎を置いてゐることは、彼をしてその洞察力の鋭敏さと記述の確實性を以つてして、今迄の社會哲學の諸文獻上に、一顧だにもされざりし人間行動の心理を、彼の「君主論」に於いて構成することを得せしめたのである。

陰謀的狀態にある社會は社會に於ける一特殊形式である。そのみが唯一の形式ではない。又、最善の形式でもない。

その社會は、「最惡の状態を續けてゐるイタリヤ都市の如く、先在する社會秩序の崩壞に悩まざるゝ人々の中に起るものである。無法なる冒險者は贈賄、引立又は登用の方法で、個人に對する忠節の關係を招來し、創造する。權謀、陰謀は社會を繋ぐものである。この社會形式

はずなはち陰謀的なる形式である。〔49〕

「ニツコロ、マキャヅェリーは、驚くべき精密さで、この關係の心理を未だ曾つて分析せられざりし程に分析した。指導者はより弱き人々を威嚇し、鼓舞せしめ、畏しめる彼の權力に依つて服従せしめるのである。彼は自己の體力の爲のみならず、同様に精力、資力、術策の爲にも畏れられ、尊敬せられる。その理由とするところは、指導者は畏るゝ者の間にあつて、畏れなき人であるからである。團結すれば、彼等は彼を止めしむることが出來たが、それは彼等がなさうとは欲しない。何故なれば彼等が彼を畏れることより、はるかに深く、壓倒的に彼等は彼等の周圍を取り巻き、永久に彼等の生存を脅やかせる敵意ある他國を畏れ、而して、鐵の如き意志を持てゐる彼等の指導者は、彼等が亦彼を畏れる如く、他國をしてこの指導者を畏れしめ得ると云ふことが彼等に判つたからである。忠實に、而して理非を問はず、彼に服従すれば彼等は安全である。彼等は自己の進むべき道を征服し、進む。彼等は國家を建設し、その版圖を擴張する。奴隸たることか、然らんずんば撲滅の二つの中のいづれかである。それ故に、君主の最高の義務は彼の權威を保つことである。國家の最高の義務はよし君主國にせよ、共和國にせよ、その版圖を守り、その發展の活氣ある性質を維持することである。〔50〕

マキャヅェリーをして、「便宜主義」(opportunism)の理論を考へ出した最初の者と見做し、彼

(49) Giddings, Historical and Descriptive Sociology, p. 13.

(50) Giddings, Studies in the Theory of Human Society, p. 105.

の名前から欺瞞、詐欺の語が作り出されたかの如くに考へ、空想的描寫の背後に、事物の眞理を得んと求めた彼の動機を非難する如きことは、彼の眞實の目的と動機とを解せざることより生ずる因襲的なる偏見と見る事が出来るであらう。

彼が十六世紀のイタリアに住み、彼の天才をして、かゝる社會史の上に於いて極めて平凡なる時代の解釋に甘せしめたことを考ふるならば、彼も亦不幸の人であつた。然しながら、彼の實證的な正確なる記述の功績に對しては、現今の我々に強き輝きを與へてゐるところで、これに對しては無關心ではあり得ないのである。若し、彼をしてペリクレス時代のアテネに生活せしめたならば、彼はアリストテレス(Aristoteles)の「政治學」(Politica)を書き得たことであらう。或は又、十八世紀のフランスに住まはしめたならば、モンテスキエウ(Montesquieu)の「法の精神」(De l'Esprit des Lois)か、ルッソ(Rousseau)の「社會契約論」(Contract Social)かを書き上げたことであらう。彼には決して、ダンテ(Dante)の「君主國論」(De Monarchia)或はトウマス・アキナス(Thomas Aquinas)の「神學大成」(Summa Theologica)は書けなかつたであらう。若し、「君主論」が社會道德一般に關する理想的姿を示さんとして、物されたとするならば、それこそ、今迄彼に加へられた非難の一切を受くるが至當であらう。然し、彼の意圖はかゝるものではなかつた。彼が統治の究極の要素としての道德力を拒んだと云ふ證據はない。更に彼が

ローレンツォをして、これを行はしめたならば、惡結果を來す如き道程を勤めて、惡意ある詭計を以つて、これに臨まんとしたとか、或は又「君主論」は大望ある人々の詭策に對して、國民に警戒せんとする恐ろしき反語集に過ぎないなど云ふ評論家のあつたことは、その人々の權威を怪しむ程である。(51)

マキャヴェリーの特殊の功績は、彼が社會的政治的考察を假設的な神學的思索の領域から引き離して、歴史に於いて説明された事實を根據として立論して歸納的觀察の道へ一步を踏み入れたことであつた。現實の状態と全く關りなしに、思索をこととして、それに依つて自己の知識體系を組み立てゝゐた中世的方法是マキャヴェリーの方法の基礎であつた「觀察と經驗」に頼ることに依つて、漸次破壊されて行つた。然し、彼がその史的觀察の範圍をローマ史にのみ限つたことは一つの缺點と云はなければならない。彼が何等か將來の事實を論證せんとする時は、このローマ史の事實を論據とする。彼はローマ史を以つてすべての歴史の尺度となしてゐたやうである。彼には未だ理想に對する最高の見方は示されてゐなかつた。

かゝるが故に、社會哲學に對する彼の主要なる貢獻は彼が用ゐた資料よりも、寧ろ彼の方法にあつた。彼の所謂「嚴格なる經驗主義」は社會解剖並びに社會統制の分野に於いて、つまるところ、歸納的研究に到達する社會考察の進み行く指針を與へたのであつた。(完)

(51) Macaulay, op. cit., p. 195.

- Barnes, H. E., *Sociology Before Comte*, American Journal of Sociology, Vol. XXXIII, Sept., 1917, University of Chicago Press.
- Bogardus, E. S., *A History of Social Thought*, University of Southern California Press, Los Angeles, 1920.
- Demold, the Historical, Political and Diplomatic Writings of Niccolò Machiavelli. 4. Vol. Boston, 1882.
- Dunning, W. A., *Political Theories, Ancient and Mediaeval*, Macmillan, New York, 1902.
- Dyer, L., *Machiavelli and the Modern State*, Ginn, Boston, 1904.
- Farnsworth, Ellis, *The Works of Nicholas Machiavelli*. Two Volumes, London, 1762.
- Gettel, R. G., *History of Political Thought*, Century, New York, 1924.
- Giddings, F. H., *Descriptive and Historical Sociology*, Macmillan, New York, 1906.
- Giddings, F. H., *Studies in the Theory of Human Society*, Macmillan, New York, 1922.
- Lichtenberger, James, *Development of Social Theory*, Century, New York, 1923.
- Macaulay, T. B., *Machiavelli*, in *Critical, Historical and Miscellaneous Essays and Poems*, Vol. I, Donohue, Henneberry & Co., Chicago, 1890.
- Machiavelli, *The Prince*, Tudor Translation, Vol. XXXIX, edited by Henley, Nutt, London, 1905.
- Machiavelli, *The Prince*, translated by Marriot, W. K. No. 280 of Everyman's Library, 1908. London.
- Machiavelli, *Fürst*, übersetzt von Rehberg, Reclam 1810, Hannover.
- Machiavelli, *Discourses on the first Decade of Titus Livius*, translated by Thomson.
- Mohl, R. V. *Geschichte und Literatur der Staatswissenschaften* Bd. III. Ferdinand Enke, Erlangen. 1858.
- Moreley, Henry, *Machiavelli*, (Romanes Lecture 1897) London, 1897

Stammler, Rudolf, Rechts- und Staats theorien der Neuzeit, Berlin, 1914.

Stein, Ludwig, Die Soziale Frage im Lichte der Philosophie, Ferdinand Enke, Stuttgart, 1923.

Sternberg, Kurt, Die politischen Theorien in ihrer geschichtlichen Entwicklung vom Altertum bis zur Gegenwart, Berlin 1922.

Villari, P., Niccolo Machiavelli and His Times, Paul, London, 1878.

Vorländer, Karl, Von Machiavelli bis Lenin, Quelle & Meyer, Leipzig, 1926.

加田 哲二 近世社會學史

今中 次麿 政治思想史 上卷

坂口 昂 概觀世界思潮

大類 伸 イキヤヅエリーの君主論に就いて(史學雜誌第四十編第十二號、昭、四、一二)

羽仁 五郎 イキヤヅエリ(岩波講座、世界思潮第五册)

朝日 融 溪 イキヤベリの政治思想と德義觀念とに就いて(社會學雜誌第三號、大正、一四、五)